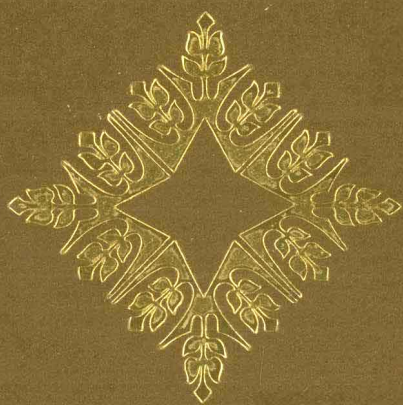




昭和萬葉集

卷十六

昭和四十五年～四十六年

講談社

昭和萬葉集 卷十六

定価 一、六〇〇円

昭和五十五年四月二十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 一―一二―二二
郵便番号 一一二一

電話 東京 〇三九四五―一一二一（大代表）
振替 東京八―三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

用紙 東洋クロス株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九八〇年 Printed in Japan

0392-441160-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷十六／目次

口絵
凡例

I

万博の日本

万国博

10

沖縄の本土復帰

13

公害

17

変貌する国土

22

宇宙時代

24

三島事件

25

若者の風俗

30

安保阻止・成田空港反対闘争

II

世界の中の日本

ソニミ虐殺

58

ベトナムを思う

60

ビアフラと南北問題

62

米軍基地

65

成田・三里塚闘争

31

反戦・反安保デモ

33

学園紛争

36

やさしき志士たち

41

戦の中で

43

規制する側

45

裁判

46

親なれば歌う

47

教師の立場

48

事のあとで

53

さまざなな思い

54

「よど」号事件

66

シージャック

67

ドル・ショック

68

日中関係

69

天皇・皇后御訪欧

69

北方領土

70

戦争の傷跡

還らぬ人

71

兵たりし日に

74

戦時回顧

76

焼跡の街から

77

抑留と引揚

79

原爆の記憶

81

戦後に

84

かえりみて

86

生活の周辺

朝の歌

87

夕暮

89

夜の歌

93

農家の苦悩

減反を怒る

122

減反にとまどう

123

転作

127

離農・出稼ぎ

128

夜の思い

96

生活の周辺

99

街頭にて

102

街

103

高層ビル

108

競馬

109

生活の歌

主婦日常

110

食べものの歌

111

酒

112

金銭

114

マイホームと現実

116

生活の歌

119

車内で

119

米作り

131

農作業

134

果樹園

135

家畜

136

農に生きる

137

農村風景

139

III

仕事の歌

海にはたらく

山にはたらく

牧畜

炭坑

工場で

鉄道員

教師

医師たち

143 142

はたらく人々

職場にて

デモ・スト

定年・退職

求職

160

165 164

さまざまな仕事

商いの歌

法の中で

156 155

157

IV

愛と死

愛の歌

挽歌

父母

父母の死

父母を偲ぶ

夫を

妻を

亡き夫・妻

離婚・再婚

170

178 175

180

182

184

185

189

191

病者の歌

癌と戦う

ハンセン氏病

療養の日々

199

202

203

みどりご

わが子

巣立ち

亡き子

孫・兄弟

師友

192

194

195

197

198

不自由な体

206

四季の歌

春

210

夏

215

秋

219

冬

225

雪

230

歳末・新年

233

自然の姿

日月風雨

234

VI

くさぐさの歌

歌会始

268

老

269

死

273

書物・美術

274

民俗

275

山

237

川

238

湖

240

鳥

243

動物

247

虫

250

魚

252

花

256

草

261

木

264

旅

263

外国の旅

264

旅情

264

神社・仏閣

264

ふるさと

264

獄中の歌

277

外地に歌う

278

青春

282

わが思い

284

女心

286

幻想

287

かえりみて

287

人間の悲しみ

ある日ある時

290 289

わが心象

くさぐさの歌

295

298

七〇年代への架橋〈昭和短歌史概論〉

一九七〇年前後〈昭和史私論〉——山田宗睦

年表

作者略歴・索引

脚注目次

〈万博の日本〉	10	シージャック	67	歩行者天国の実施	106
日本万国博覧会	10	ドル・ショック	68	歩道橋反対訴訟	107
万国博の経緯	12	中国をめぐる国際情勢	68	都市計画と高層ビル	108
万国博の周辺	13	天皇・皇后の御訪欧	71	競馬の大衆化	109
沖縄返還問題	14	〈戦争の傷跡〉		〈生活の歌〉	
沖縄返還問題	16	四次防計画	74	主婦の座	110
公害と住民運動	18	「飢餓世代」	78	消費者物価と再販商品のポイコ	110
公害の告発	20	天皇・皇后の原爆慰霊碑参拝	82	マイホームと生活水準	114
環境行政	22	朝鮮人被爆者問題	83	モータールからビューティフルへ	117
米ソの宇宙開発競争	24	「戦争を知らない子供たち」	84	「ソビエト戦争」宣言	118
「おおすみ」	25	南北問題	64		
三島事件	26	「よど」号事件	66		
		ソソミ虐殺	58		
		ベトナムを思う	60		
		ビアフラ問題	62		
		高橋和巳の死	53		
		赤軍派	42		
		学園紛争	36		
		七〇年安保問題	34		
		成田闘争	32		
		〈安保阻止・成田空港反対闘争〉			

ノーカー運動	119
《農家の苦悩》	
減反と転作	124
生産者米価	132
農家の実情	138
《仕事の歌》	
漁業	142
白蟻病	144

石炭産業の斜陽現象	145
ブルー・カラー	148
国鉄の経営問題	150
家永教科書裁判	152
保険医辞退問題	154
青法協問題	156
スパー・マーケット	157
労働者と賃金	158

コンピューター	160
《はたらく人々》	
高度成長の軌跡	163
脱サラリーマン	164
高齢者の雇用問題	167
《愛と死》	
第二次ベビー・ブーム	192
《病者の歌》	

成人病	200
《自然の姿》	
外国旅行	238
デイスカバー・ジャパン	262
《くさくさの歌》	
歌会始	269
ウーマン・リブ	285

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に
つくられた短歌を対象として、一般投稿
歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌
等々を、選者の選をへて編纂した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もし
くは初出掲載誌発刊年等）によって分類
し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分
類・配列した。また分類ごとに初出作品の
上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等
を必要に応じてつけた。
・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末に
つけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は
：で示した。

〔例〕大8：（生年のみ判明）

：昭20（没年のみ判明）

・出典は、原則として編纂部が典拠とした
ものを示した。『』は歌集、『』は新
聞・雑誌などを、また（ ）内の数字は、
刊行年、刊行年月（日）号を示す。

〔例〕形相（23）（昭和二十三年刊）

『アララギ』（17・2）《雑誌『アラ
ラギ』昭和十七年二月号》

『朝日新聞』（17・12・8）《昭和十
七年十二月八日号》

・二首以上の収録作品で、出典が複数とな
っている場合の表示。

〔例〕『アララギ』（17・9、10）《九月号
と十月号》

『アララギ』（17・9）『三首』（18
・3）『二首』《十七年九月号から三

首、十八年三月号から二首》

・必要に応じて、出典の下に原典につけら
れた小題を付した。

〔例〕『露原（22）——食生活』《歌集『露
原』にある『食生活』という小題の
ついた一連からの抄出》

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表
作の典拠等をへゝ内に記した。
〔例〕《北支にて》《日記より》

《沖修二『阿南惟幾伝』（45）より》

5 戦後の現代かな使いによる作品を除いて、
作品の表記は旧かな使いを原則とした。な
お、漢字は原則として新字体を使用した。
よみがな（ルビ）は編纂部の判断で加減した。

6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、
太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお
（ ）内は執筆者名。

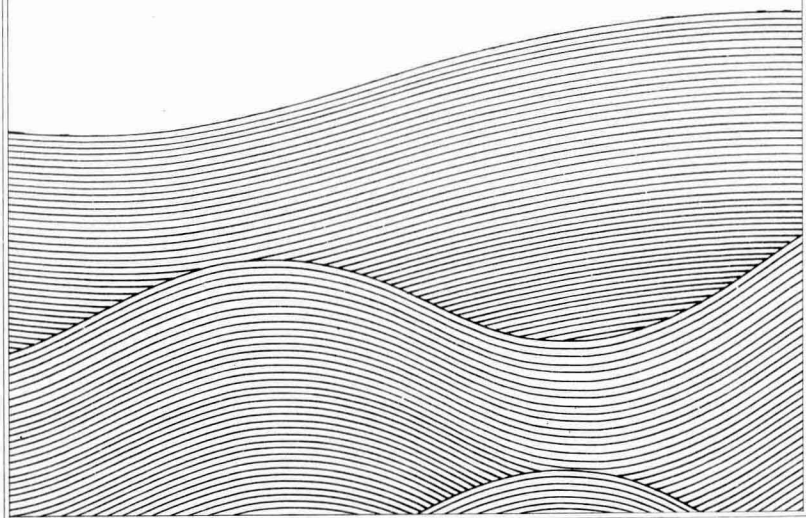
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解
を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられていた詞書は、必要
に応じて『詞書』と頭につけて脚注欄に引
用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当
する脚注の頭に、*または**をくりかえ
し付して、対応させた。

■ 本巻収録の作品の作者、著作権者で、所在
不明等のため、連絡のとれない方がありま
す。巻末作者略歴・索引の*印を付した作
者がこれに該当しますが、お心あたりの方
は、編纂部まで御一報くださいますようお願い
いたします。

I



万博の日本

江草 晃 昭2『塔』(45・1)

万国博

万博の期日迫れば拒否しゐし路地に道路の工事は始まる

東宮 昭8

朝の日に道辺の雪は輝きて晴れし空の下万国博覧会開く

藤井正念 明36昭和55『コスモス』(45・9)

万博へ家族揃ひて行く日ぞと目覚めし未明雨降るらしき

内藤きよみ 大7『朝日新聞』(45・10)

亡き父の征^ゆき苦しみし国なればビルマ館の列に我は並びぬ

松本 保 大3『アララギ』(45・8)

月の石見たりとのみ言ふ三時間アメリカ館に入り待ちし人は

吉田 甫 明40『アララギ』(45・7)

機体の底はだらにこげしアポロ見て動悸してをり柵をにぎりて*

日本万国博覧会 昭和四十五年三月十五日から九月十三日まで、大阪府吹田市の千里丘陵で開催された。会場は広さ三三〇万平方メートル、外国からは国際機構、政府、州、都市、企業など九二、日本からは政府、公共団体、公社、企業など三二、合計一二四の団体が参加した。会期一八三日で入場者数は六四二万八七七〇人、九月五日には八三万五八三二人と一日の入場者として最高を記録。日本人観客は六二五万人、外国人は一七〇万人、参加国、観客数ともに史上最大であった。「人類の進歩と調和」をテーマとして掲げ、テーマ館の大屋根を突破して高さ六五メートルの「太陽の塔」があり、隣接してお祭広場を交歓の場とした。展示では宇宙開発や映像が人気を呼び、アメリカ館の月の石やアポロ十一号の実物模型が人気を集めた。資金は二〇〇〇億円を越え、運営収支は一六四億八三五〇万円の黒字を出した。(原田勝正)

*アポロロケットの車に乗って天空を駆けめぐった、ギリシア神話の太陽神。ここでは一九六九年七月二十日、初めて月面着陸に成功したアメリカの宇宙船アポロ十一号。

辰見健一 「アララギ」(45・7)

蛇多くすみゐし万博会場に月の石見むと人等ひしめく

工藤智子 「コスモス」(45・9)

月の石見んと^{ひしめ}群のがれてひとり^{しまさる}縞猿を見る*

浅井幹雄 「塔」(45・5)

押されつつ暫し見たりき月の石ガラスケースに飾られており

靴ずれをこらえ入り来ぬ小国のパビリオンには人等少し**

飯田恒治 大14 「心の花」(45・11)

赤軍派の学生ひとり太陽の塔にのぼりしが朝の話題に*

高橋加寿男 大9

金属にて樹木象りし^{かたじけ}塔ひとつ暑き日昏れて無数の光

一條和一 明37 「アララギ」(45・8)

竹藪のあひだにイタリヤ国旗見ゆ万国博にけふ風強く

大河内由芙 明42 「日本歌人クラブ編『年刊歌集71』(46)より」

* 縞猿 西アフリカ産のマンドリルのこと。オスの顔は白、赤、青の縞模様になっている。一〇と二〇

匹の群をつくり、草根、昆虫等を常食とする。

** パビリオン 仮の建物。ここでは展示館。

* 赤軍派の学生 昭和四十五年四月二十六日夕方、「赤軍」のヘルメット姿で太陽の塔にのぼった男は五月三日早朝、一九九時間ぶりに逮捕された。犯人は北海道旭川の元市職員で、直接赤軍派とは関係なかった。

はるかにてパビリオンの屋根ひかりゐる炎天のもとわがあゆみゆく

牧田勝四郎 明34「アララギ」(45・8)

パビリオンいくつか急ぎ見めぐりて石に坐りてわがひとりなり

森田まさえ 大2「アララギ」(45・8)

巨大なるパビリオン仰ぐ我が片^{かた}辺に視力乏しき兄は黙しつ

囲 清 昭5「コスモス」(45・9)

万博を三日見て来て疲れたり妻子もわれも泥のごと寝る

藤井啓子 明43「アララギ」(45・6)

万国博見て来し疲れまだ残り椅子寄せて流しに牛^ご蒔そぎゐる

多度津 増 明33「コスモス」(45・9)

万博等見たくもなしと言ひし我や一度^{ひとたび}行きてそぞろとなりぬ

横山俊男 大5「酒中華」(46)

原爆悲惨の相を世界に示さざりし万国博といふを憎みぬ

水田芳文 「読売新聞」(45・3・13)

万国博の経緯 日本万国博覧会は昭和十五年、いわゆる紀元二六〇〇年に誘致する計画があつたが、戦争のため中止された。昭和三十八年一月、大阪商工会議所前会頭杉道助が同所の新年祝賀会で万博誘致を提案、翌年四月、大阪府が政府に要望書を提出、十一月、閣議で正式決定、十二月、国会は万国博覧会条約批准案を可決、昭和四十年四月三日、政府は会場を大阪府の千里丘陵に決定した。九月十日、パリの博覧会国際事務局は大阪万博の開催を決定、四十一年五月十一日、同事務局は日本の提出した会の性格や運営方法などをきめた一般規則、さらに出品の分類表を承認した。日本における機関には、政府が委託する財団法人日本万国博覧会が昭和四十年に設立された。開催時の関係職員は一万一〇〇〇人、会長は石坂泰三、経連顧問、副会長には堀田庄三、永野重雄など、常任理事には足立正、左藤義詮、中島馨など、事務総長には鈴木俊一と、財界や大阪府知事、市長、官僚などが首脳部を占めた。(原田)

万国博無意味なりきと剛直に言ひ出でてひとり画面より消ゆ

猪飼ミチ子 昭8「潮音」(45・4)

菜を洗ひつつ思ふ万国博見たくなし月の石など更に見たくなし

高安国世 大2「塔」(46・1)

カーレーター風洞の如き中を来る人なき椅子の幾百となく

万国旗ひとつひとつ降ろしゆく節度を持ちて人なき闇に

神名利和 大11「塔」(45・12)

あれ程に使いし言葉の「パビリオン」秋風と共に去りてゆきたり

田口良三 明34「コスモス」(46・12)

見事なる縄文期土偶ただ一つ万国博の記憶にのこる

宮国泰誠 大4「朝日新聞」(46・7・11)

散らばりて遠海原に島いくつ祖国を夢み帰る日待つ

泉国夕照 明39「武都紀」(45・3)

二十余年の悲願祖国に帰る日の近きを思ひて暁雲さわやか

万国博の周辺 万国博覧会は、一般に都市名を冠するのがこれまでの常識であったが、ここでは大阪万国博覧会とせず、日本万国博覧会と呼び、国家的行事として万国博は準備された。その中心は財界とくに金融資本の主導権が重きをなしていた。建設費五二三億円、土地購入費二四八億円、展示館準備費用一〇二八億円、運営費三七九億円と費用総額は二〇〇〇億円を越え、東京オリンピック終了とともに「万博ブーム」がつづいた。そのかけ声は「あと××日で万博」と人びとの目を数年前から万博にひきつけた。開催の昭和四十五(一九七〇)年は日米安保条約の期限満了の年にあたっていたが、千里丘陵は竹林が切り開かれ、巨大な会場建設がすすみ、それを中心に大阪国際空港の設置、千里ニュータウンの建設など、大阪とその周辺の都市開発が同時に進行、博覧会開催とともに新幹線は一、二両から一六両編成に増結するなど、各交通機関は日本国中から人ひとをここに運んだ。万博に反対する「反博」の動きも、安保継続阻止の動きも、この波に呑みつくされた観があった。(原田)

平山良明 昭9「あけもとの島」(47)

黒煙を吐きて飛び発つその下に知花^{ちげな}彈藥倉庫の眠る*

「祖国復帰」とは日本の戦前へ還るのかと疑いてみる状況と知る

広岡富美 昭5「未来」(45・2)

弾頭の無き胴体のみが運ばれてメースB撤去と公開さるる**

メースB西に真向けて構えたるその姿勢もちて外交を言うか

窪田章一郎 明41「まひる野」(46・9)

砂糖黍枯れしをば焼く日照りの島人はおびゆる毒ガス撤去に

白日のもとに毒ガス運びをり隠したるもの隠しおほせず

すすごと撤去の毒ガス船に積み殺戮の意志いづこにはこぶ

田中静江 大9「家庭画報」(46・5)

毒ガスをはこぶ道路に家あれど夫子^{つまご}なければ逃げじと嫗^{おうな}*

山田芳子 大11「潮音」(46・9)

沖繩の毒ガス移送米兵のみマスクを持てるをみじろがず見る

* 知花は沖繩市北部にある地名。

** メースBは沖繩に配備されていた

アメリカ軍の核ミサイルの一種。

* 嫗は老女。

沖繩返還問題 昭和四十三年十一

月十日、最初の主席選挙で革新系

の屋良朝苗沖繩教職員会長が自民

党総裁西銘順治を破って当選し

た。十一月十九日、嘉手納基地で

B52が爆発、十二月七日、いのち

を守る県民共闘会議が結成さ

れ、翌年二月四日B52常駐一周年

の日にゼネストを決行することと

した。しかし屋良主席は一月上京

して政府と交渉、六・七月撤去の

感触をえてスト中止を呼びかけ

た。このころから復帰問題はだ

いに現実化し、この年十一月訪米

した佐藤首相は二十一日ニクソン

大統領と共同声明を発表、その内

容は一九七二(昭和四十七)年返

還、日米安保継続、米軍基地本土

なみであった。沖繩ではこのよう

な内容の本土復帰に強く反対する

運動が展開された。昭和四十五年

には米軍基地で働く人びとの組合

全軍労のストが繰り返され、五月

三十日貝志川市の米兵による少女

暴行、九月十八日糸満町の主婦轢

殺などが続発、十二月二十日、コ